

■今月の特選句

2025年9月



人体の噴火口より汗の玉

井口夏子

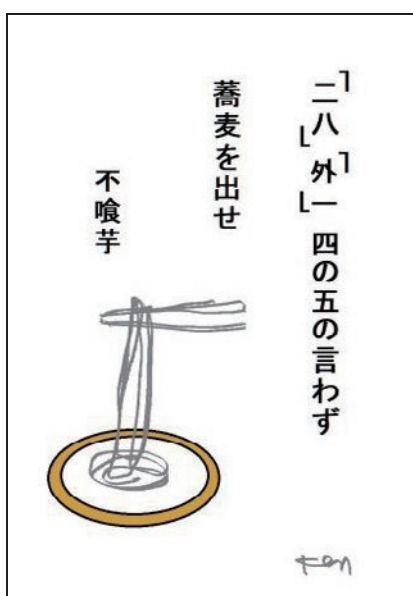
「人体の噴火口より」と何のことかと思わせる奇抜な表現で読者をひきつけ、下五で「汗の玉」と謎解きをしているのが巧い。「噴火口」が決め手。



くたくたの背なに暑さが重すぎる

上山美穂

暑さは気温であって、重さで測るものではない。そんな当たり前の固定概念を覆して見事である。作者の感じた暑さと疲労の実感がよく出ている。



「二八」「外一」四の五の言わず蕎麦を出せ

不喰芋

蕎麦の麺の配合で、「二八」「内二」は小麦が二で蕎麦が八。「外一」とは、小麦が一で蕎麦を十とするものである。数字を上手く使って滑稽句に。

■今月の特選句

2025年9月



人間を地球に置き去り天の川

日根野聖子

天文学の知識が句になった。宇宙は膨張しており、銀河は我々から遠ざかる運動をしている。つまりは、地球人は置き去りにされているらしい。



にわか雨破れ傘でも借りようか

ほりもとちか

なんだ、この句は季語がないじゃないか。いえいえ「破れ傘」が季語です。植物の一種で、葉が半開きの破れた傘のように見える愉快的な山草である。



ごほうびは好きなアイスよペダル漕ぐ

渡部美香

作者は自転車で坂道を登っているらしい。ここを乗り切れば、家でアイスのご褒美が待っている。もうひと頑張りと脚に力が入る。童心がいいね。

■今月の秀逸句（・・・七七をつけてみました）

牢名主居そうな蛇の穴に入る
・・・疑心暗鬼でびくびくしつつ

青木輝子

いくたびも洗ふ白靴陸上部
・・・白い靴ほど早く走れる

柄川武子

たましひも燻(いぶ)されてゐる炎天下
・・・早く冷やさむ天の川にて

大林和代

入道雲の筋肉もりもりボディビル
・・・雲の世界もコンクールあり

沖枇杷夫

蠅取りリボンの捻れままならぬ恋の如
・・・くつ付いた後離れ難くて

桑田愛子

蟬わめく罵詈雑言重ねつつ
・・・残り少ない命と知らず

桜井美千

もの言へぬほどの幸せアイス食ぶ
・・・口いつぱいにほほばり過ぎたか

高須賀溪山

噴水の飛沫が風の形なす
・・・見えない風を視覚化したね

尚山和桜

遅れ着く音を待ちをり遠花火
・・・花火の大きさ音で体感

長井知則

パラソルは廻すものよとひとり行く
・・・今日もつぶやくケセラセラよと

松浦百重

貧乏と若さの似合う大西日
・・・若さがあれば怖いものなし

村越 縁

その裏を覗いて見てみたい入道雲
・・・裏は手抜きをした形かも

森岡香代子

遊び場の遊具さわれぬ暑さかな
・・・火傷に注意の貼り紙貼らむ

横山洋子

■今月の滑稽句

* 今月の特選句・秀逸句以外の佳句を青字で表示しています。

いつの世もどこかで戦火敗戦忌	青木輝子
不器用で世渡り下手やおけら鳴く	青木輝子
ホラー談義にテンション上がる熱帯夜	井口夏子
他人のふりや素通りのサングラス	井口夏子
八朔を喰うにひょっとこ顔となり	池嶋久春
葡萄の実映る画面に手が伸びる	池嶋久春
朝刊は涼しきうちに配らるる	池嶋久春
昼寝せず結局「ポワロ」観てしまふ	池田奈美子
その陰で誰を見つめるサングラス	池田奈美子
夏の夜の匂ひが運ぶ記憶かな	池田奈美子
君も孔雀メンズファッション花盛り	池田亮二
青春はゆるキャラの中ディズニーダンス	池田亮二
花火大会行きはよいよい帰りは怖い	伊藤浩睦
処暑なれど終りの見えぬこの気温	伊藤浩睦
海の水分けて野分の吹きにけり	伊藤浩睦
アンケート用紙に滲む汗の文字	稲葉純子
川床料理の酒の肴やせせらぎも	稲葉純子
人魚姫遊泳禁止など知らず	稲葉純子
燕の子巢立ち間近の落ちさうな	井野ひろみ
散水のホース破れて水遊び	井野ひろみ
信心の無き人孫と墓参り	井野ひろみ
スツキリの部屋を散らかしセミの声	上山美穂
プツンシュワーピオーネ体にしみてゆく	上山美穂
愛称で呼ばれ恥ずかし祭の夜	卯之町空
泡盛や手から始まるカチャーシー	卯之町空
ナイターや夫の沸点下がります	卯之町空
炎天下上塗りをする日焼け止め	梅野光子
夏じまひ花火も青い海も見た	梅野光子

雲の峰せんたく物が乾ききる
名刹の沙羅の名残の有馬山
梅雨明けに続く離島の地震厳し
渇水や信濃の出穂悲鳴上ぐ
敗荷やかつての日本に「三角大福」
野ぶどうの産地もデーターになる戦地
炎帝や日光黄菅も立ち往生
赤信号物価と残暑と顔の皺
遠浅ではしゃぎ泳ぐ子夏の海
熱中症の予備群量産熱帯夜
鰻食べ精をつけたしウナギヌ
墓洗ふスポンジ忘れコンビニへ
揚花火観ながら家で庭花火
討たないでムカデじゃないのよヤスデなの
遅かりし茎のずらりと彼岸花
大食いで家の重しに野分待つ
電柱の顔みな違う炎天下
日焼けしてポストの全身真っ赤っ赤
干潮に素肌焼いてる夏の海
成人日親子三人手をつなぎ
円周率夏の床屋で三・一四
遅日なり慌てて風呂に入るなり
遅日とて酒の量には変化無し
ここいらが落とし処よ芋の露
空を切るバット猛暑を振り切れず
小判草乾ききつたる軽さかな
夏の川洗濯すれば魚寄る
子の声とプール開きの笛の音と
西瓜食べ終はれば種の飛ばしあひ
映え映えの小蠅払って味吟味

梅野光子
柄川武子
柄川武子
遠藤真太郎
遠藤真太郎
遠藤真太郎
大林和代
大林和代
沖枇杷夫
沖枇杷夫
奥野元喜
奥野元喜
奥野元喜
加藤潤子
加藤潤子
加藤潤子
門屋 定
門屋 定
門屋 定
北熊紀生
北熊紀生
木村 浩
木村 浩
工藤泰子
工藤泰子
工藤泰子
黒田恵美子
黒田恵美子
黒田恵美子
不喰芋

インスタにハマる女房秋暑し

汗だくを着替へ終へれば汗だくに

飛魚は水切石となり進む

一打二打三打四打と打つ百足

真桑瓜値札は爺の匙加減

大漁旗の法被飛び入る盆踊

夏草の頑固大地にへばりつく

丹田にどすんと響く大花火

後朝の体験授業夏休み

立秋とジョニーが来たら伝えてね

鈴虫を郵便局が売つてゐる

助太刀や孫もて余す氷菓子

羅のお酌や微笑み聞き上手

サングラス外しマジマジ頼み事

豚肉とパイナップルのマッチング

子らの帰省に頼母子をおとさねば

北海道のナンバー見つけ盆の道

百歳の母も乾杯生ビール

泡ばかり立たせてビールつぐ娘かな

ごくごくと打ち水を飲むアスファルト

紋白蝶の恋市中で見失う

母国へ帰りたいひまわりの種

生年月日はいらない急げ花火

学童の波かき分けて夏の海

熱中症に成りさう蟬の数かぞへ

血液型何んでも宜しやぶ蚊かな

生身魂酔えば御箱の唄一つ

忘れ潮月の子どもがあちこちに

クーラーの無力炎暑の此の窓辺

不喰芋

桑田愛子

桑田愛子

小泉和子

小泉和子

小泉和子

桜井美千

桜井美千

敷島鐵嶺

敷島鐵嶺

敷島鐵嶺

壽命秀次

壽命秀次

壽命秀次

上甲 彰

上甲 彰

上甲 彰

鈴鹿洋子

鈴鹿洋子

鈴鹿洋子

鈴木和枝

鈴木和枝

鈴木和枝

高須賀溪山

高須賀溪山

高田敏男

高田敏男

高田敏男

田代輔八

怖づ怖づと空蟬に触る五十路かな
四阿(あずまや)のベンチに座すや否や汗
夕涼み飛田新地は竜宮に
音楽に身を委ねたる夏の朝
[図書館を出れば西日の待ち構へ](#)
[いつだろメロンの食べ時わからない](#)
ゴッホの薔薇ルノアールのバラ球子のばら
好き過ぎた漫画に色を塗りし夏
早口の店主へ尻を向ける茄子
白服を脱ぎ捨てトルソ胸を張り
[サングラス下に小心隠してる](#)
初蟬や爺爺言うな還暦を
[午後二時のひとりカラオケ風鈴の](#)
河童忌や冷やで黄桜差し差され
送り火に猫も尻尾を立てて見ゆ
[水争い婆の団扇も武器となる](#)
赤とんぼ米の値聞くや空を舞う
[三尺寝微妙に合はぬ枕かな](#)
野良猫になつかれてゐる朱夏の街
闊歩するシャッター街の祭獅子
大夕立タイムマシンの着く気配
[水切りの石で蹴散らす鰯雲](#)
[水不足天の川には備蓄水](#)
迎え火に目印赤く細工して
「いつもの」と頼む幼女やかき氷
UFOに拐われできぬ夏課題
[大半の願いは無視して星流る](#)
七人の敵は失せたり鰯雲
[稲雀かしましまるでオーケストラ](#)
飛びたたんばかりに風の胡蝶蘭

田代輔八
田代輔八
田中 勇
田中 勇
[田中 勇](#)
[谷本 宴](#)
谷本 宴
谷本 宴
月城花風
月城花風
[月城花風](#)
土屋泰山
[土屋泰山](#)
土屋泰山
百目鬼強
[百目鬼強](#)
百目鬼強
[尚山和桜](#)
尚山和桜
長井多可志
長井多可志
[長井多可志](#)
[長井知則](#)
長井知則
永井流運
永井流運
[永井流運](#)
西野周次
[西野周次](#)
西野周次

挨拶は統制されたか暑いねえ
昭和百年格別重い終戦日
頑張った分だけビール旨くなる
顔の肝斑(しみ)日焼で消えてしまひけり
愛犬は抱かれて散歩残暑道
墓参帰らないでと俄か雨
日盛の家並の影が焦げ臭い
片蔭は無料提供されてをり
山開き押すな押すなの富士登山
生ビール一杯二杯が後を引く
夏選挙絵にかく餅は喰えぬ餅
勲章のやうにかなぶん胸に付け
戦ある島を遠くに海紅豆
美しきものになるらし大毛虫
心持ち離れて座る夏座敷
何よりも枕の涼し落語会
街騒を静めて去りし大夕立
足指で貝を踏み当て潮干狩
風なくば口を開かぬ風の鈴
夏バテの文字のくねくね疲れをり
にんげんに塩ふりかけて炎帝炎ゆ
無関係それも関係遠花火
ひたい打つ扇子に思案引き出され
花氷浮世の風に身を削り
バンカーバスター六発トマト熟る
夜の秋ふうわりと乗る体重計
もう少し離れませんかへこき虫
せっかちな母が待ちをり瓜の馬
何もかも暑さのせいと宣ひぬ
父の日やかなはぬものに母の日ぞ
梅雨入や梅雨明いつと気の騒ぐ

花岡直樹
花岡直樹
花岡直樹
久松久子
久松久子
久松久子
日根野聖子
日根野聖子
細川岩男
細川岩男
細川岩男
ほりもとちか
ほりもとちか
松浦百重
松浦百重
三木雅子
三木雅子
三木雅子
南とんぼ
南とんぼ
南とんぼ
峰崎成規
峰崎成規
峰崎成規
棕本望生
棕本望生
棕本望生
村越 縁
村越 縁
村松道夫
村松道夫

妻逝きて株の遺産や雲の峰
春蟬の第一声はフライング
大木を沸騰させる蟬の声
病葉の美しき一枚捨てきれず
攻撃の目で構へゐる子かまきり
しばらくは卓に眺めて蟬の殻
チョコバナナ預け踊の輪にはいる
デラウェアまとめて口に放り込む
苦瓜は未熟の中に味がある
草茂るわれの怠惰を笑ふかに
うらめしやいつまで続く極暑の日
炎天下拳突き出し三墨打
燕飛ぶ飛行機雲を追いかけて
石鎚のきらきらゆれる夏木立
旧友と何年ぶりかなアイスティー
さまようてひと日の長き水母かな
流水のプールでせっせと芋洗い
手招きの船頭多しスイカ割り
エアコンに弱きわたしは冷房症
盆踊りせなを押しゆく夜風かな
日傘の骨くたびれはてる炎天下
風鈴や舌を躍らせ歌い出す
寝言でも暑いとこぼし熱帯夜
かき氷食べられて嗚呼へたり込む
夏ばてにあらず畦地梅太郎の山男
怪獣が息を吐く吐く夏の雲
幼子が駆けて来し道夏の雲
寅さんと同じ浅草傘雨の忌

村松道夫
森岡香代子
森岡香代子
八木 健
八木 健
八木 健
八塚一青
八塚一青
八塚一青
柳村光寛
柳村光寛
柳村光寛
山岡純子
山岡純子
山岡純子
山下正純
山下正純
山下正純
横山洋子
横山洋子
吉川正紀子
吉川正紀子
吉川正紀子
渡部美香
渡部美香
和田のり子
和田のり子
和田のり子